半年ぶりに観客を入れたチューリヒ歌劇場

5月1日、半年ぶりにチューリヒ歌劇場へ観客が吸い込まれていった（上限50人の制限付きだが）。演目はバレエのプレミエで、《チェンバー・マインド》の再演とコロナ禍で初演が延期となっていた《ウォーキング・マッド》初演のセットだ。

2014年に当劇場がスロヴェニアの作曲家ミルコ・ラザールに委嘱した《チェンバー・マインド》は当歌劇場オーケストラのコンサートマスター、アダ・ペシュと欧州でもチェンバロの第一人者として活躍している北谷直樹のデュオのみだが、オーケストラ・ピットから響く生の音が、ライヴ演奏に飢えている耳に沁み入る。シンプルなチェンバロの和音と共に幕が上がると、ダンサーたちと共に徐々に展開していくその音楽は、ピアソラのタンゴのように聴こえたり、琴や琵琶、尺八の合奏を思わせたり、ときには推理ドラマのBGMのようにスリリングだったりする。「バロックしか知らないチェンバリストが、ここまでこの良さが出せるものだろうか」と思うほどの名演だったが、あんのじょう、この曲で出会ったあと、ラザールは北谷に曲を献呈し、CDも録音されていた。

後半の《ウォーキング・マッド》はラヴェル《ボレロ》やアルヴォ・ペルトの録音に合わせたヨハン・インゲルのスピーディな作品だが、ダンサーのなかでいちばん光っていたのが、2020年よりソロ（グループ内）に昇格した前田明里だった。束ねた黒髪が赤いワンピースに映え、細部まで研ぎ澄まされた動作と弛緩したときの情緒で、言葉にならない感動を誘った。

上限50人では観客入りオペラ公演はまだむずかしいため、5月13日には当歌劇場総裁のアンドレアス・ホモキが演出したストラヴィンスキー《兵士の物語》がプレミエ上演された。フィルハーモニア・チューリヒの第1コンサートマスター、バルトゥオミ・ニジョウほかの先鋭楽団員と、当歌劇場常連のルーベン・ドローレとマルティン・ツィッセットが俳優さながらの芝居を見せたが、歌声が聴けないのはやはり物足りない。

したがってオペラは公式ホームページ上で過去の公演配信を続けているが、新演出では、マドリード王立歌劇場と共同制作したR・シュトラウス《カプリッチョ》を観せた。マドリードで2019年にプレミエ上演され、ちょうどいまごろチューリヒ歌劇場でもお披露目となるはずが、コロナ禍に見まわれたため、マドリードの映像だけでもチューリヒの観客に紹介した形だ。冒頭から優美な亡霊たちが登場する幻想的なクリストフ・ロイの演出は、R・シュトラウスの音楽の魅力を引き出しており、いつかライヴで観たい。

《兵士の物語》から。チューリヒ歌劇場は5月1日に再開した ©Toni Suter

再開したトーンハレ管

歌劇場よりひと足早く聴衆入りコンサートを再開したチューリヒ・トーンハレ管弦楽団の第2弾はヤクブ・フルシャの指揮。ドヴォルジャーク「ヴァイオリン協奏曲」ではジョセフ・スペイセクが、深く激しい音色と軽やかで輝かしい音を楽章ごとに使い分けて自信に満ちた共演だった。ドヴォルジャークの弟子で義理の息子のヨゼフ・スク作曲《おとぎ話》ではフルシャの技が細部まで聴かれた端正な仕上がりだったが、遠くまで訴えかける力に欠けたのは、ライヴ同時配信の4月30日に所見したからだろうか。

それから昨年はコロナ禍で延期された音楽総監督パーヴォ・ヤルヴィのコンダクターズ・アカデミーが、5月9～12日にようやく開催された。150人のなかから昨年選ばれていた9人のうち6人のみの参加だったが、すべてストリーミングで、オーケストラのなかから指導するP・ヤルヴィの様子や受講者の指揮姿が細部まで見られる。指揮を志すものにとっても、P・ヤルヴィの指揮の秘密が惜しげなく伝授された貴重な資料となるだろう。パルス音楽祭に招待されるグランプリは25歳のベルギー人、マルティン・デンディーベルに、聴衆賞は28歳のスイス人、ローラン・ツッフェレイに決まった。

5月21日には、出演者が多いメンデルスゾーン《夏の夜の夢》のため、初めてIDAGIO上で無観客有料ライヴ配信を行った。まずP・ヤルヴィがスティーヴン・イッサーリスをソリストに迎えたシューマン「チェロ協奏曲」では、冒頭から哀愁にあふれた音色で十分に歌わせるイッサーリスのチェロを生で聴きたかったものだと悔やまれた。最後まで生きる喜びとエネルギーが炸裂した演奏だった。

続く《夏の夜の夢》でも、「序曲」と奇数番号の曲の抜粋で、エネルギッシュな演奏を聴かせた。

その他のニュース

ジュネーヴ大劇場は5月3日、バーセル《ディドとエネアス》新演出を発表したが、前回のモーツァルト《皇帝ティートの慈悲》に続き、視覚的不快感にあふれていた。前回は難民が逃れて来た国の悲惨さを表したのかと擁護したが、今回はさすがに2019年に就任したカーン総裁の趣向かと思わざるを得ない。

5月5日、ルツェルン・フェスティバルが長い沈黙を破って精力的なプログラムを提示、17日にはチューリヒ歌劇場も新音楽総監督ジャンナンドレア・ノセダと共に、来シーズンの演目を発表した。6月からようやく100人までの観客収容を許可する政府の決定を受けて、希望が見えて来たスイスだ。